

ロマンス劇『冬物語』に見られる限定的幸福
— 喜劇的結末の中の悲しみの要素 —

はじめに

長い年月をかけた赦しと再生の物語であるウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『冬物語』 (*The Winter's Tale*, 1610)¹ はシェイクスピアの円熟期に書かれた作品であり、死者の再生というロマンス劇の特徴を有する作品である。前半の暗いトーンに対して、後半の明るいトーンという対比でこの劇は二つの部分に分けられる。通常は明るいトーンで終わるこの作品は幸福な結末と考えられている。

主人公のリオンテーズ (Leontes) がおかした妻ハーマイオニ (Hermione) への罪が許される瞬間とは、死んだと思われていた妻が実は生きていたと分かる時である。通常、この瞬間をもって幸福な結末と考えられているのだが、この瞬間に暗い要素を認めている批評家がいるのも事実である。Walter S. H. Lim は像に扮するハーマイオニが動き出し復活することは、特にプロテスタントにとって不安要素であるとしている。その理由としてハーマイオニに仕えるポーリーナが用意した復活のための場面は、
“ Paulina's gallery is strikingly loaded with the signs of both Italian secular art and Catholic forms of worship: there is the reference to Julio Romano, whose name cannot be extricated from the contaminating context of papal politics ”(319)であって、宗教的な面からマイナスの要素があるとしている²。また Sarah Dewar-Watson は夫であるリオンテーズの妻ハーマイオニへのひどい扱いが、像と思われていたものが動き出す事によって許されると思えるが、そこには緊張が存在していると述べている。サラはこの場面の力点は母親であるハーマイオニと娘パーディタ (Perdita) にあるとし、“ Hermione's silence towards Leontes registers a tension between husband and wife, in pointed contrast to the tenderness with which she greets Perdita ”(77)

と夫婦和解と考えられる場面に疑問を投げかけている。また James A. Knapp はこの作品は悲劇ではないとしながらも、“Initially, as a piece of art, the statue of Hermione seems to serve as an emblem of the tragic events detailed in the play’s first three acts. In this sense the statue can be read as an epic tribute to the power of patriarchal and discursive violence to silence female speech and turn the female subject into an object for the male gaze”(274)とし、像に扮しているハーマイオニそのものの様子に暗い見解を示している。このように喜劇的結末を決定づける場面に疑問を投げかけている批評家は存在する。では実際にポーリーナ(Paulina)に促され、ハーマイオニが像に扮して乗っていた台から動き出す場面を詳しく見てみよう。

Paulina Start not; her actions shall be holy as
You hear my spell is lawful. Do not shun her
Until you see her die again, for then
You kill her double. Nay, present your hand.
When she was young you wooed her; now in age
Is she become the suitor?

Leontes O, she’s warm!
If this be magic, let it be an art
Lawful as eating.

Polixenes She embraces him. (5. 3. 104-11)

夫婦の愛の復活と考えられる場面をリオンティーズは「食事同様に正当な行為」と表現しているが、彼のこの発言に不吉な意味をとらえる事は出来ないだろうか。食事とは空腹が満たされれば終了するものであり、長く続くものではない。またポーリーナにハーマイオニの手を先に取りように促されるリオンティーズであるが、リオンティーズを先に抱くのはハーマイオニである。リオ

ンティーズはハーマイオニの手を取ったかもしれないが、ポーリーナの注意は無視されている。なぜなら若いときにはリオンティーズが先に求めた愛が、年を取ってからは妻に先に求めさせるのですか、というポーリーナの注意はハーマイオニがリオンティーズを先に抱く事によって否定されているからである。つまりリオンティーズが妻より先に愛を求める事にはなっていない。愛を求めるこの行動に疑問が生じるのだ。

以上の3人の批評家の意見、およびハーマイオニの動き出す愛の復活の場面に対しての私の見解から、喜劇的結末と思えるこの作品に限定的な喜劇性を見出せるのではないか、という論題が成りたつ。ここではリオンティーズを中心に論を展開し、この劇の幸福と考えられる結末に疑問を投げかけてみたいと思う。

1. リオンティーズの王権の限界

劇の起こりはシチリア王リオンティーズがボヘミア王ポリクシニーズ(Polixenes)を自国の宮殿でもてなし、滞在を延長するように説得している場面である。ポリクシニーズはリオンティーズの説得には応じなかったが、リオンティーズの妻ハーマイオニからの説得にはすぐに応じて滞在の延長を決める。その結果、リオンティーズが嫉妬し、その嫉妬によって話が展開していく。リオンティーズの嫉妬は急であり、彼がハーマイオニとポリクシニーズの不貞を疑い始めるのは論理的ではない、というのがこの劇を一読して感じる事である。しかし、妻ハーマイオニの説得は本当に非がないと言えるのだろうか。リオンティーズに説得の顛末を説明するハーマイオニの言葉を引用してみる。

Leontes

Why, that was when

Three crabbèd months had soured themselves to
death

Ere I could make thee open thy white hand
And clap thyself my love; then didst thou utter
'I am yours for ever.'

Hermione

'Tis grace indeed.

Why, lo you now, I have spoke to th' purpose twice.
The one for ever earned a royal husband,
Th'other, for some while a friend. (1. 2. 100-7)

リオンティーズの愛を受け止め永遠を誓ったという説明がある。その永遠を誓った愛の言葉は、ポリクシニーズを説得した言葉と同じように立派な働きをした、と語るハーマイオニである。ハーマイオニの夫への愛の言葉と夫の友人ポリクシニーズの説得の言葉は、はたしてハーマイオニの言うように同じような意味で立派な働きをしたと言えるだろうか。愛の感情の言葉は別の次元で考えられるべきであり、一度目の夫の愛の受諾、二度目のポリクシニーズの説得と並べて考えるのはおかしいのではないか。愛の言葉と客の説得を同じ次元で話すハーマイオニは、夫の嫉妬を買うには十分な理由を有している。リオンティーズの嫉妬はある意味妥当性を持っている。

ポリクシニーズはリオンティーズとの幼少時の仲の良さをアダム以来の原罪とは無縁であったと語っているが、ハーマイオニとの会話では、ポリクシニーズの妻が誘惑して心の中に忍び込んできたと説明する。そしてハーマイオニ自身もポリクシニーズとの会話の中で、自分たちがもとで原罪をおかしたのなら、その責任は自分たちが負う、と語っている。つまり誘惑の存在としての立場を説明してしまっている。リオンティーズの嫉妬に妥当性を見つけることが出来る。ハーマイオニの説得の言葉に非を見出すのは的外れではない。

しかし、妻ハーマイオニの言葉に非があるとしても、それをコントロールできないのは国王としてのリオンティーズの資質の間

題と言える。妻に対してのリオンテューズの考えは、嫉妬がもとでひどい扱いを受ける事になるハーマイオニを弁護するポーリーナへの言葉で明らかである。ポーリーナとその夫アンティゴナス (Antigonus) にリオンテューズはこのように声を荒げる。 “ A gross hag! / And losel, thou art worthy to be hanged, / That wilt not stay her tongue ” (2. 3. 107-9)。妻の言葉を制する事が出来ないのは、夫の責任と考えるリオンテューズである。これはハーマイオニの言葉を制する事が出来ないリオンテューズ自身、妻の言葉を適切なものとして制する事が出来なかったリオンテューズ自身に当てはまる。リオンテューズの夫としての資質は限界を示していると自ら認めている。

またリオンテューズとポリクシニエズの仲に対して Thomas Kullmann は “ The hereditary imposition from which perpetual boyhood might have cleared Polixenes and Leontes is, of course, what the Christian churches refer to as original sin: Because of Adam and Eve’s first transgression none of us can help being a sinner ” (318) と述べているがこの評もリオンテューズの原因をおかすべき存在としての不完全性、欠陥を意味するものとしての証拠となるであろう。リオンテューズは、自分の妻の行動及び自分自身の両方において資質の限界を示している。

劇の起こりはリオンテューズがポリクシニエズを説得してもっと自国へ滞在するように促している場面である。そしてリオンテューズの説得は度が過ぎるきらいがある。ポリクシニエズはこれ以上自分の国を留守にするわけにはいかない、自分の不在中に国で何か起こってはいないか心配でならないと説明する。リオンテューズのポリクシニエズへの滞在の延長の申し出は、ある意味迷惑をかけているとも考えられる。この事を David Ruiter は “[T]he giving Sicilians end up receiving, and the receiving Bohemians assume a debt. Whether Leontes, Camillo, and the rest of the Sicilian hosting party create this situation consciously or

unconsciously, their gift has become a conscious and definitive burden of debt ” (159)としている。もてなしをしているはずのリオンテューズ側が実は受け取っており、もてなしを受けているはずのポリクシニーズが重荷と感じてしまっており、逆にリオンテューズ側に満足を与えているという状況を作ってしまった。リオンテューズの行動は、良かれと思う事が悪い方向に向かうという逆の結果を生んでいる³。

これを踏まえて行動が逆に作用するリオンテューズの部下について考えてみたい。嫉妬によってリオンテューズからポリクシニーズを殺害するように命じられたカミローは、ポリクシニーズに以下の言葉を述べる。

Camillo

For myself, I'll put

My fortunes to your service, which are here

By this discovery lost. Be not uncertain,

For by the honor of my parents, I

Have uttered truth— which if you seek to prove,

I dare not stand by; nor shall you be safer

Than one condemnèd by the King's own mouth,

Thereon his execution sworn. (1. 2. 434-41)

リオンテューズからポリクシニーズへ仕える主人を変えるカミローのこの言葉は、リオンテューズにとっては裏切りである。そしてカミローはポリクシニーズのもとで職務を果たし続ける事になる。リオンテューズからの命令への不服従がカミローにはプラスの結果を生んでいる。もう一人リオンテューズから命令を受けたアンティゴナスの場合はどうだろうか。アンティゴナスはリオンテューズに対して、王とハーマイオニの間にできたパーディタは決してハーマイオニとポリクシニーズの間にできた不義の子ではない、と強く語りパーディタを捨て去る事に反対する。しかし

結局、アンティゴナスは命令を辛いながらも実行し、パーディタを異国の荒地に置き去るという行動をとる。そしてアンティゴナスはパーディタを置き去りにした後、狩りに追われた熊に食い殺されるという結末をむかえてしまう。命令に服従した結果が命を落とすというマイナスを生んでいる。命令に背いたカミローは良い結果を手に入れ、命令を実行したアンティゴナスは悪い結果を被るといふ事が起きているのである。王の命令に対しての正反対の態度、不服従と服従がそれぞれプラスの結果とマイナスの結果という正反対を生じている。リオンテューズのポリクシニーズへのもてなしと同じように逆の効果を生んでいるのが分かるであろう。

国王の命令という絶対の言葉は不服従が良い結果を生み、服従が悪い結果を生むという、王の権威への疑問を生じさせている。こうした事からもリオンテューズの王権の限界を証明する事が出来るのではないか⁴。妻の言葉を制する事が出来なかったリオンテューズ、また彼の命令と部下の服従、不服従が逆の結果を生むというその性質の両方において、リオンテューズは王権の限界を自ら示してしまっている。完全性にはほど遠い存在となっている。

2. 劇に見られる悲しみの要素

本稿の目的は喜劇的な結末と思えるハーマイオニの復活やその他の登場人物の和解に対して、喜劇的要素に限界を示す事であった。この劇に限定的幸福を見出すのが狙いである。具体的にこの劇の中の悲しみの要素を取り上げてみたいと思う。

リオンテューズの治めるシチリアは当然のことながら王があつてこそ成立するものであり、リオンテューズ一代限りのものではない。ハーマイオニとポリクシニーズの不貞を疑ったリオンテューズは幼王子マミリアス(Mamillius)の血縁まで疑い始める。アポロンの信託にさえ耳を貸さないリオンテューズの行動によって結

果的にマミリアスはどうなるのだろうか。マミリアスは死去するのである。この事はリオンテーズの後を継ぐ国王が失われたことを意味する。幼王子としてのマミリアスは当然のことながら将来の国王を期待されているのであり、その彼がシチリアから姿を消す。シチリアにとって暗い影が差し始めたのは明らかであろう。そしてマミリアスは復活する事はない。政治的意味でこの事は明るい喜劇とは程遠いのではないか。そして後に復活する事になるハーマイオニの以下の台詞にも彼女の結末に不完全な幸福を見出す事が出来る。

Hermione To me can life be no commodity;
The crown and comfort of my life, your favour,
I do give lost, for I do feel it gone,
But know not how it went. My second joy,
And first fruits of my body, from his presence
I am barred like one infectious. My third
comfort,
Starred most unluckily, is from my breast,
The innocent milk in it most innocent mouth,
Haled out to murder; . . . (3. 2. 91-9)

ハーマイオニにとって最高の喜びであったリオンテーズからの愛は復活する事になる。そして第三の喜びである娘の赤子も後に生きていることが分かり再会を果たす。しかし彼女にとって第二の喜び、息子のマミリアスは死去することで復活はしない。ハーマイオニから隔離されたまま命を失ってしまう事で、悲しみの別れを彼女は経験する。初の王子を失うという事は先に挙げたシチリア王の継承者を失うという政治的な意味以外にも、女性の心情の観点からも悲しみの要素である。マミリアスが復活しないのは、政治的にも母親のハーマイオニの心情にとっても悲しみの要

素と言える。

通常この劇はリオンテューズの後悔という変化が鍵になっている。しかし彼に変化しない要素があるのも事実である。作品の序盤でリオンテューズとポリクシニーズは、ポリクシニーズの言葉を借りるならば、日向を飛び跳ねて鳴きかわす双子の子羊のようだった、と互いの共通性が強調されている。この共通性が変化しないリオンテューズを語るのに重要な要素である。

ポリクシニーズは第4幕第4場で自分の息子フロリゼル(Florizel)と羊飼いの子として育てられたパーディタの恋愛を決して認めない。ポリクシニーズは一方的に自分の考えを示し、パーディタにこのように言い放つ。

Polixenes

if ever henchforth thou

These rural latches to his entrance open,
Or hoop his body more with thy embraces,
I will devise a death as cruel for thee
As thou art tender to't. (4. 4. 434-8)

女性に対して一方的な強権をふるうポリクシニーズの様子が明らかである。ここでは息子フロリゼルとパーディタの恋愛感情はみじんも考慮されていない。女性は従わせる存在なのである。

これを踏まえて今度はリオンテューズのハーマイオニへの態度を考察してみよう。ハーマイオニが石像に扮している状態で、動き出す前のリオンテューズのハーマイオニへの語りかけを引用してみる。

Leontes

Her natural posture.

Chide me, dear stone, that I may say indeed
Thou art Hermione— or rather, thou art she
In thy not chiding; for she was as tender

As infancy and grace. But yet, Paulina,
Hermione was not so much wrinkled, nothing
So agèd as this seems. (5. 3. 23-9)

自分に非があるように語りかけているリオンテューズであるが、結局自分を咎めないでくれと石像に頼んでいる。なぜならハーマイオニは幼子のように優しい女であったのだからと説明している。これは幼子の従順さを印象付けるのに十分な台詞である。リオンテューズは自分を咎めないでくれと語りつつ、ハーマイオニに従順さを求めている。ポリクシニューズの女性は従うものという態度との共通項を見出すことが出来るであろう⁵。劇の前半で双子の比喩が用いられていた事は既に説明したが、後半でも似た属性をポリクシニューズとリオンテューズは示している。William R. Morseはリオンテューズについて“ Leontes’s preoccupation with rationality is a particular effect of the character’s place in a discourse of essentialist individualism: reason becomes a crucial concept within the play because it represents an authorizing ground for the individualism that Leontes pursues ” (290)と述べ、リオンテューズの自己中心的な思考を説明している。こうした意見は先に引用したリオンテューズの石像への態度の説明として、議論を強化するものである。

さらにリオンテューズの女性への一方的態度はこの他にも見出すことができる。ハーマイオニが生きていと分かり作品の終盤ですべてが丸く収まったかに見える中で、召使のポーリーナは既に失っている夫について“ My mate, that’s never to be found again, / Lament till I am lost ” (5. 3. 134-5)と悲しみを示している。そのポーリーナに対してリオンテューズは自分の同意によって夫を迎えなければならないとし、かつての部下であったカミローを新しいポーリーナの夫とすることを提案する。良かれと思っただけのこのリオンテューズの行動もやはり彼の一方的見解では

ないか。かつての夫をいまだ思っているポーリーナへの新しい夫の提案は彼女の感情を考慮に入れていない。しかもこの計らいにはリオンティーズ自身の同意によってなされると語られている(5.3.135-6)。女性を従わせるリオンティーズの態度は作品の最後のこの場面においても明らかである。Maurice Huntは“After all, Leontes' name refers to the lion”(336)とし、“the prototypic savagery of bears include the mention of lions as equally ferocious and pitiless”(336)としているが、リオンティーズの女性への一方的態度はライオンの獲物を食う様子、強権とも近い。残酷さは名前にも表されている。リオンティーズは劇の前半で妻ハーマイオニについて一方的な不貞の疑念によって、彼女を残酷な目に合わせている。自己中心性が明らかにされていた。そしてここで示したようにリオンティーズは作品の終盤でも女性への自己中心性は変わっていない。この節では喜劇的結末とも思える作品は、シチリアの世継ぎの息子は死んだままで復活しない、そしてハーマイオニの息子を失った悲しみも回復する事はないという、悲しみの要素がある事を説明した。そしてさらに変化しないリオンティーズの自己中心的態度を説明した。この劇の最後には悲しみの要素が存在し、後悔と喜びを経験して変化したと思えるリオンティーズにも、変化しない部分を見出すことができるのだ。

結論

時の経過によりリオンティーズの改心と妻の復活が起こり喜劇的結末をむかえる、というこの物語に対して、喜劇性への疑問、限定的な幸福要素を挙げる事が本稿の論題であった。第1節では、妻の言動を御せない事自体がリオンティーズの夫としての、そして国王としての限界を示しているし、また服従した部下が死というマイナスの結末をむかえ、服従しなかった部下が生き延びて幸福をつかむという、リオンティーズの王権の絶対性に対して疑問

が生じている、という事を明らかにした。リオンテューズの力は絶対ではない。そして第2節では、世継ぎとしての息子が復活しないのは、国家としても妻ハーマイオニの感情にとってもマイナスである事、またポリクシニーズとリオンテューズの類似性により、彼の女性に対しての自己中心性は最初の頃と変化していない部分がある事を証明した。つまり王権そのものが絶対ではないし、変化していないリオンテューズは復活した妻を得ることになるが、再び不幸を経験してもおかしくない、という予想が出来る。

この事は劇の主要な要素である時による以下の説明によって明らかにされる。劇の1部と2部を分ける時に登場する時の台詞を引用する。

Time

Let me pass

The same I am ere ancient'st order was,
Or what is now received. I witness to
The times that brought them in; so shall I do
To th'freshest things now reigning, and make stale
The glistering of this present, as my tale
Now seems to it. (4. 1. 9-15)

リオンテューズを変えるはずの時は上の説明では変化しない属性が明らかにされている。変化しない時の特性はそのままリオンテューズの再び失う幸福とも重なるのではないか。つまり、変わったはずのリオンテューズの境遇は変化せず悲しみが繰り返される可能性がある。この時に対してのマイナスの意味は劇の前半でも明らかにされている。Scott Colley はポリクシニーズとハーマイオニの会話によって嫉妬を感じるリオンテューズについて“ Standing before Leontes are emblems of the past (the Polixenes of his boyhood) and of the future (the regenerating, pregnant Hermione). Past and future are joined hand in hand

after a visit of nine months!”(48)と説明している。つまり、過去と未来の結合により、リオンティーズの現在の嫉妬が生じている。過去、未来、現在の時は続く不幸のマイナスの意味として機能しており、この意味でも時にマイナスの意味を見出すのは不思議ではない。

ここままで明らかになったようにリオンティーズの王権の限界、劇に見られる悲しみの要素、時に対しての変わらない特性と繰り返される悲しみの可能性、こうした事から喜劇的結末と思えるこの作品には実は限定的な幸福しか手に入っておらず、真の幸福は得られていない、という結論が導き出される。これが本稿の論題に対しての答えである。

この世で完全な幸福はあり得るのだろうか。常に悲しみと幸福の要素は混ざり合い、その引き算によって人生の色が暗いものになるか明るいものになるかが決定される。これが世の常であり、そんな現世での人間の置かれている状況を考えさせるシェイクスピアの『冬物語』である。令和の今にも通じる400年前の作品ではないか。

註

1. 以下、『冬物語』からの引用は、William Shakespeare, *The Winter's Tale*, Oxford UP, Oxford World's Classics シリーズ、2008年の版に拠る。
2. カトリック信仰のジェームズ1世に対してプロテスタント信仰の息子ヘンリー・フレデリックの違いなど、両者の性格の差は多く伝えられている。平和王としてのジェームズ1世に対して、戦争を好むヘンリー・フレデリック。夭折はしたが、美男子で人気のあったヘンリー・フレデリック信奉者の宗派、プロテスタントとの関連でこの批評は興味深い。
3. 実際にポリクシニーズの暗殺は行われませんが、一国の王を暗殺したならば、続く戦争は避けられるはずはなく、この意味でもリオンティーズの行動が裏目にでる特徴は明らかである。
4. 王権神授説を唱えたシェイクスピア活躍時代の国王、ジェームズ1世の暗示とも考えられる。シェイクスピア作品においてジェームズ1世の暗示は随所に見られるからである。例えば、魔術、学問に力を入れていたジェームズ1世に重なるように、シェイクスピアは魔術を作品に度々登場させている。
5. この二人の共通項を性の観点から Kirstie Gulick Rosenfield は “Leontes and Polixenese share a perception that all women are witches, corrupted by the spirit of Eve and their own sexual desire” (97) と説明しているが、ここでは服従させるべき女性という共通項として挙げてみた。

引用 · 参考文献

- Belsey, Catherine. "Shakespeare's Sad Tale for *Winter: Hamlet* and the Tradition of Fireside Ghost Stories." *Shakespeare Quarterly*, vol. 61, no. 1, 2010, pp. 1-27. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/40731136>.
- Colley, Scott. "Leontes' Search for Wisdom in '*The Winter's Tale*.'" *South Atlantic Review*, vol. 48, no. 1, 1983, pp. 43-53. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/3199512>.
- Hunt, Maurice. "'Bearing Hence' Shakespeare's '*The Winter's Tale*.'" *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 44, no. 2, 2004, pp. 333-46. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/3844633>.
- Knapp, James A. "Visual and Ethical Truth in '*The Winter's Tale*.'" *Shakespeare Quarterly*, vol. 55, no. 3, 2004, pp. 253-78. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/3844149>.
- Kullmann, Thomas. "SHAKESPEARE'S '*WINTER'S TALE*' AND THE MYTH OF CHILDHOOD INNOCENCE." *Poetica*, vol. 46, no. 3/4, 2014, pp. 317-30. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/24710217>.
- Walter S. H. Lim. "Knowledge and Belief in '*The Winter's Tale*.'" *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 41, no. 2, 2001, pp. 317-34. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/1556191>.
- Morse, William R. "Metacriticism and Materiality: The Case of Shakespeare's *The Winter's Tale*." *ELH*, vol. 58, no. 2, 1991, pp. 283-304. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/2873369>.
- Rosenfield, Kirstie Gulick. "Nursing Nothing: Witchcraft and Female Sexuality in '*The Winter's Tale*.'" *Mosaic: An Interdisciplinary Critical Journal*, vol. 35, no. 1, 2002, pp.

95–112. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/44029940>.

Ruiter, David. “Shakespeare and Hospitality: Opening ‘*The Winter’s Tale*.’” *Mediterranean Studies*, vol. 16, 2007, pp. 157–77. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/41167009>.

Shakespeare, William. *The Winter’s Tale*. Ed. Stephen Orgel, Oxford UP, 2008.

Dewar-Watson, Sarah. “The Alcestis and the Statue Scene in *The Winter’s Tale*.” *Shakespeare Quarterly*, vol. 60, no. 1, 2009, pp. 73–80. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/40210320>.